

無い話である、又一つは自然宗教的の觀念を生じて、崇美、敬虔などの心さへ、起させる。

▲恐怖の教育 子供には此の恐怖と言ふ事に就いて、漸々と教育する事が必要である、まづ中を三つに大別して甲を爲てならぬ事、乙をすべき事、丙を一體の方針とする爲てならぬ事は、子供を戲

れに脅す事、これなどは世間に能く有る事でお父さん達が子供の怖るのを見て態々種々な真似をして脅す、そして其驚方が面白など、悦んでる人が随分ある、これは大に注意すべき事である、

それから教育手段として脅の濫用、恐れを恐れで癒す事などは大に考へなければならぬ。

▲お伽噺、芝居 彼のお伽噺、子守唄、芝居なども大に注意を要する、今見た所、面白と言ふ事のみと主眼として、唯恐しい怖いと言ふのを、土

臺として書いた本などが随分と多い、これ等は徒らに小供の恐怖心を強らしめるばかりで、何の役に

も立たない、元來日本の化物は、怖いと言ふばかりで極めて無意味である、先づこれからして第一

に改良しなければ行けぬ、其處へ行くと西洋の化

物などは進んだもので、花の中でダンスを行るとか、歌を唱ふとか少しの恐しい味も無い、化物と言へば些細の問題のやうであるけれども延いて言へば國家的の問題である。

▲教育上の問題 終りの丙一體の方針はスタンレー

ホール氏の説であつて、教育上の問題として恐怖は、棄つべきものに非ず、導くべきもの也、本

能的恐怖より道徳的の畏怖へ、威嚇的恐怖より崇

美的畏敬へと斯う言つて、以上の如くに恐怖は一面恐しい結果を生ずると共に、又一面には利

益となる事もあるのである、であるから強ち恐怖を制さうとするよりも、寧ろ漸次に好い方面へ導

くと言ふ事が第一の要件である。

宗教は家庭の中心

高楠順次郎氏談

物質文明の勢力が日に増し盛んになつて社會の組

織か益々煩雜になる時代に完全な生涯を送らうとするには第一に我々の生活と思想とを單純にする。と云ふ事を心得て居なければならぬ、生活と云ふものは餘儀ない場合には極く單純にすることが出來やすいけれども富の程度が許すに隨つて實は許さぬ程度までも煩雜になる傾きがあるから富の程度が許す時でも常に複雑な生活は成る可く避けて最も單純な最も趣味ある生活を選べ物質的生活を單純にする計りでなく精神的生活を單純にして日常の思想を簡易にして腦力を休養して行く事に注意しなければならぬ此注意が足りないとなれば若く身體も働き盛りにあるべき時に神經衰弱に係る人が多い偉大な精神は複雑な思想や疲勞した腦漿から湧き出るものでない、それと同じく偉大な人物も亦決して煩雜な贅澤な生活から生み出される者ではない、昔から、低き家が高き精神を養ふしと云ふ言葉も其意味に外ならぬのである。偕て何故に思想や生活を簡單にしなければならぬかと云ふと、我々の生存は本來甚だ複雑であつて其複雑な世に處するには自己の身心の休養を目的と

し子弟の訓育を本旨とし出來得る限り生活を單純にして弊害の生ずべき餘地のないやうにするのが肝要である而して我々の生存が如何に複雑であるかと云ふに我々は物質的生存を全ふする上に精神的生存も完全にしなければならず其又其精神的生存も自ら二方面に分れて居て一面には倫理的生存があり、他の一面には宗教的生存があるのである拙著「國民と宗教」に述べて置いた通り、人を本位として人と人との融和を計るのが倫理である絶對を本位として絶對と人との合一を期するものは宗教である、絶對とは宇宙に一つあつて二つとな最高真理を指すのであつて或は至上神とも無上佛とも云ひ得るもので一言に云へば即ち「神」である此神と人との合一を期するのが宗教であつて神人の合一と云ふ事は何も現世の人が天上に赴いて神に合するの事ではない我々の實際が「人」であり我々の理想が「神」であるから我々は何時かこの理想を實現して人が神の地位に迄進み實際とも出來得ると云ふことを人に教ふるのが宗教で

ある人間は井上圓了博士の云はれた通り理性があると同時に信心がある信心の充足は宗教でなければ出来ず信心のない人は根の無い浮草と同じやうで護謨人形のやうに綺麗に動いて居ても魂はないのである、物質の風潮に感化れた人達は得て宗教を無用視するが信心の満足を主とする宗教を捨てて置いて商業道德などを説くのは根本を捨てて枝葉を養はんとするもので遂には道德を一つの手段に遣はんとする靈僞に陥るのである虚榮の生活で靈僞の道德で物質一方の拜金宗が盛んになつたら日本の風潮は遠からず西洋と同じよになるであらう物質的生存では西洋と負けずに競争しなければならぬが同時に精神的生存では我國の特色を充分發揮しなければならぬそれを忘れて物質文明に目が眩み宗教までも無視するのは大なる間違である凡て社會一般の道德は倫理的生存の配下に屬して居て倫理は社會に於て養はるゝ人の感情で宗教は宇宙に於て養はるゝ人の感情で前者は社會(人)を對手として居るが後者は宇宙(神)を對手として居る之を清水文學士は社會的感情(倫理)宇宙的

感情(宗教)と稱して居て宗教の方は根柢が深く範圍が廣く理想が高い無論之は一般の倫理學者が皆然う云つて居る話ではないが併しどうしても倫理ばかりで社會を支配することは出来ない之と同時に宗教ばかりでも世界を完全にすることも出来ない歴史あつて此方倫理と宗教とは相助けに行はれて來た倫理は宗教に依つて一層その光を放つのであるが唯その本務とする所が少し相違して居る今倫理的生存と云ふ事を圖にして見ると凡そ左の通りである

倫理的生存

(家族生活(父子關係)
社會生活(同胞關係)
國家生活(君臣關係))

義務忠心

倫理的生存には以上の如く凡そ三方面があつて廣い意味で云へば皆社會的生活に入るべきものであるが家族的、國家的を別にして教へるのは日本に於て殊に必要があり、且つ昔からの歴史的教育法である我國の教育の淵源は實にこの兩方面から出るのであるから倫理の根本も亦この二つに在るそこで殊に之を三方面に分つたのであるこの三方面に向つて各々その本務を盡すのが倫理的生存を

御一代聞書などを一二章宛讀み心を利けて朝食し
 各自の仕事に就き夕刻は又一同佛前に同一の式を
 行つて眠りに就くのである、唯以上の儀式は讀經
 の修法にのみ終つて家庭教育の全體に影響を及ぼ
 すことが尠くないから可成之を訓育の中心とする
 やうに注意しなければならぬ宗教と云へばやゝも
 すると迷信に流れ易いものであるからこの點は充
 分注意しなければならぬ一、祈禱卜占は一切之を
 禁すべきこと、二、一神一佛以外の禮拜は之を禁
 すべきこと、三、信念生活に導き宗教的信念が倫
 理的象現の實果と相伴ふやう注意すべきこと、此
 三點の備はりたる宗教なら如何なる宗教でも宜し
 い兎に角宗教がないと家庭の規定が中心を失つて
 その訓育を全ふすることが出来ない人と人との關
 係には倫理の方が多く物を言ふやうに見へても人
 間以上の勢力を認める點になると倫理の黙止する
 所に宗教は發言權を持つのであるそこでこの點に
 一定の信念が定つて居ないと生に迷ひ死に惑ひ人
 間以上の聲には耳を掩ふて止むやうになる之れで
 到底人の情意は満足することが出來ずその信性を

二〇
 満足することが出來ず宇宙に棲息して自然に生ず
 る理想も満足することが出來ないそこで個性の修
 養を計るためにも、子弟の教育の爲めにも、家庭
 の規律を保つ爲めにも個人信念の樹立を期する爲
 めにも宗教は家庭生活に於て最有力な中心點と
 ならねばならぬ。

室内の裝飾

吉田博氏談

▲室内裝飾 と之ふ事に就きましては自分でも大
 分久しい以前から考究致して居りましたが凡そ日
 本の家屋に對して室内裝飾を施すには三様の場合
 があらうと思ひます、即ち第一は從來の日本建築
 木造建築に裝飾を施す場合第二は建築構造を
 全く改め西洋風に裝飾する場合第三は西洋風の建
 築靴穿きの室を成るべく日本趣味と調和させ
 て裝飾する場合であります、從來の日本建築に於
 ける室内裝飾を見ますのに往々何等裝飾的の意義